

令和元年6月18日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02186

研究課題名(和文) 表現メディアの特性と時代変遷の研究

研究課題名(英文) Study of the characteristics and historical transition of expression media

研究代表者

木村 陽子 (Kimura, Yoko)

大東文化大学・文学部・准教授

研究者番号：20736045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：戦後以降の日本のアダプテーションの実例を、小説・戯曲等の文献やDVD等の映像資料から確認することで、アダプターやマルチメディア・クリエイターたちの創作実態を調査した。特に、複数メディアで活躍する現代の実践者たちには聞き取り調査を実施し、各メディアの優位性や技術的・市場的制約についてどのように考えるかなど、クリエイターのメディア認識やメディア選択の実状を明らかにした。また今日、とりわけ国語教育において日本文化の特徴としてアダプテーションに注目が集まるようになった経緯を跡づけるとともに、高校国語教科書に掲載されている「アダプテーション」教材の特徴を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまで文学作品の商業的成果を拡大するためのマルチメディア展開のように捉えられがちだった「アダプテーション」を、創作者の立場から捉え直すことで、新たな意味付けを行うことに貢献した。特に、現代のアダプテーション作家への聞き取り調査から、「創作エンジン」や「テーマ深化」といったクリエイターからの視点を解きほぐし、これらが過去の作家たちにも有効に作用していたことを論証した。また、「本歌取り」や「見立て」などの素地があった日本文学史においてアダプテーションが重要な役割を果たしてきたことにも着目し、近年の国語教育の教材がアダプテーションという視座から見直せることも示した。

研究成果の概要(英文)：I studied how works has been created by adaptor or multimedia-creator through mainly researching literature such as novels or plays and dvd-materials about application of postwar literary adaptation in Japan. I interviewed adaptation practitioners active in multiple media and I revealed facts of media-recognition or media-choice of creators, how they think of superiority or technical and marketable limitation in each media and so on. Further I studied why literary adaptation has come to attract attention as a feature of Japanese culture in Japanese language education and revealed characteristics of literary adaptation teaching materials adopted in Japanese language textbooks of high school.

研究分野：芸術一般

キーワード：アダプテーション 三島由紀夫 高畑勲 平田オリザ 国語教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)研究代表者は、一般には小説家として知られる安部公房が、小説以外の複数のメディアで積極的に表現活動を行った点に注目した『安部公房とはだれか』(笠間書院)を2013年に上梓した。スポーツにおける近代5種目が、1人で射撃・フェンシング・水泳・馬術・ランニングの5競技をこなし順位を決める複合競技であるのに対し、安部は自らの手法をそれになぞらえ、小説・映画・演劇・ラジオドラマ・テレビドラマ(メディア5種目)をそれぞれのメディア特性を追求しつつも、ほぼ同列に扱い、1つのテーマに対して多角的な迫り方をしながら思考を練り上げた。そうした安部の表現活動を、前掲書では「リテラリー・アダプテーション」の概念によって特徴づけて論じた。

(2)小説の映画化や舞台化、逆に映画や舞台の小説化といった一方向の他メディア展開よりもさらに広い概念として、「ワンソース・マルチユース」という言葉がある。核となる文学的テーマや発想を、紙メディア(小説/コミック)、音声メディア(音楽/ラジオドラマ/ボイスドラマ)、映像メディア(映画/テレビドラマ/アニメーション)、舞台メディア(演劇、オペラ、能、歌舞伎、舞踊、バレエ)などの複数のメディアで展開することは、製作効率や商業的価値を高めるための手法として現在では広く知られている。研究代表者は、こうしたマルチメディアへの表現展開を、商業的な効率性とは別次元で、「一人の表現者が芸術的な興味と関心から複数のメディア展開を行う活動」として浮かび上がらせるために、あえて「アダプテーション」の語を用いた。

(3)多種多様な表現メディアの選択が可能となった戦後以降、何らかの表現欲求を持つ者が頭の中に湧き出た着想を社会に届けたいと思いついたとき、最初に行われる重要な決断はメディア選択である。しかし、日本ではある時期まで、各メディアに伝統的な徒弟的システムが存在したため、自由なメディア越境を志向する者たちの大きな障害となっていた。助監督経験のなかった石原慎太郎や大林宣彦が映画監督に就任した際に、東宝撮影所の助監督部会が協力を拒否した例などは有名である。こうしたことから、表現者のメディア越境に対する各業界の反応をも歴史的に跡づけたマルチメディア・アート史の編纂の必要性を感じ、そのための端緒として、本研究では戦後を代表するメディア横断者である安部公房と三島由紀夫の事例を取り上げ、1950年代から70年代において活発に試みられた彼らのメディア越境やアダプテーションの検証を行うことを企図した。

(4)歴史検証が重要である一方で、研究代表者が興味を持つのは、現代のマルチメディア・クリエイターたちの創作実態である。そのため本研究では、複数メディアを駆使する現代の実践者たちに聞き取り調査を実施し、彼らがどのような意図、認識からメディア選択を行っているのか、各メディアの特性をどのように考えているのかを調査したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「アダプテーション」の概念を導入することで表現活動の全容がより捉えやすくなるタイプのオールラウンダー的性格をもつ表現者を選定し、その活動を全方位的に捉え言語化することにあつた。1950-70年代には、国内には安部公房、三島由紀夫、寺山修司、石原慎太郎らが、国外にはサミュエル・ベケットやハロルド・ピンターなどがあり、彼らは互いの動向を意識し、競い合っていた。そうした動向は、後に本格化するメディアミックスの商業展開の前史、あるいは今日の双方向的なメディア間の横断・交流の起源とも位置づけ得るが、それらの先駆的な業績は従来の文学史、演劇史、映画史等の枠には収まりにくく、新しい視点からの歴史的評価の必要性を感じた。他方、ゼロ年代以降に加速したウェブ社会化による文化の変容によって、多くのマルチメディア・クリエイターが輩出されたが、過去のアダプテーション研究ではメディア選択の実情や創作実態を、クリエイターやビジネスサイドに直接聞き取り調査をした例は少なく、その視点からのアプローチが必要だと考えた。こうした研究は、既存の各種アート史の間隙を埋めるとともに、それらをつなぐ役割をも果たし得る点に独創性があり、各種メディアのより深い理解向上にも寄与し得ると考えた。

3. 研究の方法

(1)国内外のアダプテーションの動向を知るために、アダプテーションについて書かれた文献資料、アダプテーションの手法を用いて創作された作品の映像資料やパンフレット、演出家、脚本家、役者らの回顧録等を広く収集し、基礎的な調査を進めた。

(2)現存するアダプター、マルチメディア・クリエイターのうち、2014年時点でアダプテーションを実践中であり、かつ問い合わせ先が入手可能なクリエイターを15人程度選出し、研究の趣旨を説明する文書と共にインタビュー依頼書を送付した。そのうち、計5人から返信があり、うち3人(松井周、前川知大、平田オリザ)にメディア選択や創作実態に関するインタビューを実施した。

(3)発表時から現在に至るまで繰り返しアダプテーションされる作品を50作品程度選定し、時代、ジャンル、頻度、アダプター、制作会社などの観点からカテゴリライズし、データベース化した。

基準として3回以上、これまでにアダプテーションされた作品については、可能な限り文献（小説、脚本、台本、上演・上映パンフレット等）や映像資料（DVD）の収集に努め、アダプターごとの演出・表現の独自性や共通点を分析した。

(4) アダプテーションについての関連文献を渉猟する中で、アダプテーションという手法（学習指導要領では「翻案」）が、現行と次期の高校国語の学習指導要領において、日本の伝統的言語文化の特徴とみなされ、重要視されていることを知った。そのため、現・学習指導要領が制定されるまでの改訂の議論を追跡調査した。また、高校国語教科書の中で重要視されているアダプテーション作品（「羅生門」「山月記」「高瀬舟」等）や作家（森鷗外、芥川龍之介、中島敦、三島由紀夫等）を中心としたアダプテーションの視点からの日本文学史編纂に着手した。

4. 研究成果

(1) 各種メディアを横断的に遡ったマルチメディア・クリエイターたちの基礎データを作成した。第二次大戦後から現在までに3ジャンル以上、複数のジャンルにまたがって表現活動を行った表現者を150人前後選定し、業績を一覧化した。調査対象としたジャンル項目は、小説、ライトノベル、コミック、絵本、映画、演劇（現代劇、歌舞伎、能楽）、アニメーション、TVドラマ、ラジオドラマ、ドラマCD、ゲーム、音楽、舞踊の15項目とした。また『キネマ旬報ベスト・テン90回全史』（キネマ旬報社、2017）を参照して、1924年から2016年までの小説を原作とする映画脚本の割合を算出、グラフ化した。

(2) 上記の結果を参考に、アダプテーションされる頻度が特に高かった8作品（竹取物語、坊っちゃん、銀河鉄道の夜、春琴抄、伊豆の踊子、グッド・バイ、夫婦善哉、鹿鳴館）を調査対象の中心に据え、後世のアダプターの視点からアダプテーションしたくなる作品の特徴を抽出・分析した。それらの成果の一部を論文発表し、国内外の学会で報告した。

(3) 平田オリザ、前川知大、松井周など現代を代表するアダプター、マルチメディア・クリエイターにインタビューを実施し、クリエイター側の捉える各種メディアの優位性や技術的・市場的制約、創作手段・批評手段としてのアダプテーションの特徴を明らかにし、成果をそれぞれ論文発表した。

(4) 日本における今日のアダプテーションへの注目の高さを確認する目的から、現行の学習指導要領・国語に記述されたアダプテーションへの言及内容を確認するとともに、高校「国語総合」の教科書に掲載された「アダプテーション」課題を一覧化し、それらの性格や想定される学習効果を調査分析した。それらの一部を成果として論文発表した。

(5) アダプテーションという視点から捉え直される表象メディアの変遷史の中でも、とりわけ異彩を放っていたのが1950-70年代の日本で試みられた、三島由紀夫と安部公房の先駆的アダプテーション実践である。本研究では、三島由紀夫のアダプテーションの特徴を、(1) 作品の映画化の多さ、(2) 舞台メディアでの手がけたジャンルの多さ、(3) 原典となる作品の多さにあつたと分析するとともに、鷗外・芥川が種をまいた「歴史離れ」の手法を、スケールの点で大きく飛躍させた三島のアダプテーションが、日本の言語文化における一つの極北を成すと位置付けた。他方、安部公房が実践したセルフ・アダプテーションは、まず現実の凝視から始まり、そこから得られたテーマを、小説で、演劇で、ラジオドラマで、テレビドラマで、映画でといった具合に複数のメディアを駆使して表現することで、1つのテーマに対して多角的な迫り方をしながら思考を練り上げていく方法である。これは、前掲三島の例に見たような、日本の伝統文化ともなじむ、典拠となる作品の世界観に上書きされるかたちで構築される翻案作品とは、根本的に性質が異なる。その意味で、安部のセルフ・アダプテーションは、世界にも類例が乏しい、独自の手法であったと結論し、以上の成果を国外の学会で報告した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

木村陽子、「三島由紀夫『鹿鳴館』のアダプテーション 銃声の多義性と選択」、『日本文学研究』、査読無、第58号、2019、pp105-122

木村陽子、「国語教育とアダプテーション 高校『国語総合』教科書の「創作」課題の検証」、『大東文化大学教職課程センター紀要』、査読無、第3号、2018、pp47-54

木村陽子、「平田オリザのロボット演劇 創作の源泉としてのリテラリー・アダプテーション実践例」、『目白大学人文学研究』、査読無、第13号、2017、pp1-15

<http://id.nii.ac.jp/1514/00000005/>

木村陽子、「語られたがる物語、語りたがるメディア 前川知大『太陽』の演劇・小説・映画アダプテーション」、『白鷗大学論集』、査読無、第31巻第1号、2016、pp95-137

<http://id.nii.ac.jp/1510/00001640/>

木村陽子、「表現者から見たリテラリー・アダプテーションとその再帰的影響 劇作家・松井周の「演劇」と「小説」」、『白鷗大学論集』、査読無、第30巻第2号、2016、pp83-105

[Http://id.nii.ac.jp/1510/00001625/](http://id.nii.ac.jp/1510/00001625/)

〔学会発表〕(計2件)

- 木村陽子、「日本文学におけるアダプテーション 歴史的背景と三島由紀夫・安部公房の先駆的实践」, 2019年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム、2019年5月12日、同濟大学(中国上海市)
- 木村陽子、「『かぐや姫』のアダプテーション 高畑アニメによる 物語の祖 への応答」, 大東文化大学日本文学会秋季大会、2018年10月23日、大東文化大学(埼玉県東松山市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。